多胎妊娠と育児

（分担研究：多胎児に対するケアのあり方に関する研究）
研究協力者：堀内　勁
共同研究者：笹本　優佳

要　約：1991～1993年に9つの施設を退院した多胎児の妊娠から乳幼児期早期の問題をアンケートにより調査した。その結果，妊娠早期から母体の精神的，肉体的ストレスが高く，アンビバレントな心理状態に容易に陥ってしまう。この状態は出産後も児の入院，実際の子育て期間にも持続し，それを助長しているのは公的，私的な支援の貧弱さにあると考えられる。また不妊治療による多胎が30％以上を占め，今後この点にも着目する必要がある。

見出し語：アンケート，多胎，育児，心理

緒　言：近年の多胎の増加に伴い，その妊娠・出産・育児がハイリスクであることが注目されている。そこで，我々は多胎を持った両親の妊娠・出産・育児について調査した。

研究方法：対象は1991年～1993年に札幌市立病院，埼玉医科大学総合医療センター，松戸市立病院，神奈川県立こども医療センター，北里大学，聖マリアンナ医科大学，聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院，大阪府立母子保健総合医療センター，鹿児島市立病院を退院した多胎441名とした。方法は郵送によるアンケート調査とした。アンケートの内容は妊娠自覚時から妊娠期間，出産，病院退院後現在にいたる乳幼児期の両親がかかえる問題を抽出するための設問55項目である。

研究成績：回答は279名から得られ，回収率は63．2％であった。平均在胎34．2±3．5週，平均出生体重1877±600g，経膣分娩85名，帝王切開179名，不明15名であった。胎数は双胎241組，品胎29組，4胎4組，5胎4組であった。家族構成は核家族219組，複合家族54組，母子家庭5組であり，同胞兄姉あり93家族，弟妹あり10家族である。夫婦の年齢は夫34．6±5．1歳，妻31．9±4．2歳であった。年収は500～800万円が42．7％，300～500万円が33．3％を占めていた。近年の多胎妊娠の増加に不妊治療が関与しているといわれるが，何らかの不妊治療を受けたものは34．1％であり，やはり高率であることがわかる。多胎と告知されたときの心理は，驚き88．8％，嬉しい39．8％，怒り3．3％，妊娠に不安50．2％，経済的不安31．6％であり，夫も同様の傾向を示した。多胎は早産の頻度が高いが，その可能性の説明は91％の妊婦が受けており，実際にも子宮収縮抑制剤の服用69．0％，早産管理のための入院は80．9％にものぼった。
入院期間は6．9±5．6週と長期にわたる傾向があった。また36％の妊婦が早産管理のため転院している。入院時の妊婦の心理としては胎児のために努力92．3％であったが，実際には安静維持のつらさ58．1％を訴えるものも多く，妊娠に対して否定的になる場合も7．3％，それを怒りとして表明したのは4．3％に見られた。出産直後は嬉しい88．5％，解放感55．3％，これからの育児に対する不安47．8％，未熟児に対する不安60．5％，合併症への不安60．3％と子育てに対する不安感が強かった。生後の転院は12．0％であったがそのうち45．8％は多胎がバラバラに別の病院へ転送されていた。生後の面会は生後1日以内が40．5％であったが，ついで生後1～3日が39．4％と多かった。これは帝切率が高いことにも関連している。児が未熟児あるいは他の合併症のため入院している間の母親の心理は分離による不安44．5％，病状に対する不安67．4％が多いが，今回の調査は新生児専門施設のためか，入院先への信頼感を85．9％の母親が表明していた。また児への面会を切望した母親は87．9％であったが，否定的な心理に陥ったものも4．5％にみられた。実際の面会回数は毎日49．3％，週に2～3回28．0％と頻回に行われていた。
児の入院期間は1月以上に及ぶものが47．7％と多数であった。退院は同時が70．0％であったが，同時に退院できないものもあり，また同時退院に賛同する母親は80．0％と多数を占めたが，品胎以上では別々の退院を希望するものも多かった。児の退院時の心理は喜び92．1％，複数の子育てに対する意欲82．3％という肯定的態度が多いが，逆に体力面の不安48．1％，経済面の不安32．6％，病院に預けておきたい16．8％と不安や否定的気持ちを表明するものも少なくなく，児の兄姉を有する家庭では兄姉に対する育児不安を32．3％の母親が表明していた。母乳保育率は11．5％と低く，同時授乳の困難さが浮き彫りにされた。多胎育児の手助けは夫84．5％，妻の母64．7％，夫の母31．3％であり，ベビーシッターを依頼したものはわずか4％に過ぎず，核家族の率が高いにもかかわらず，家族以外の支援の欠如を伺わせる。このため友人との間が疎遠になったものは妻55．8％，夫44．5％と，ここでも孤立する夫婦像が浮かんでくる。家族による支援の期間は3月以内が46．5％であり，1年以上は33．8％であったが，長期の支援は複合家族の場合が多かった。育児の相談は親戚50．7％，保健所4．0％であった。保健所保健婦による新生児訪問は78．1％がうけており，また児が退院した病院への受診も77．3％と高率であったが，その内容に満足するものは，それぞれ26．4％，50．5％と予想外に低率であった。生後1年以内の育児中の心理としては充実していた38．7％，忙しいが意欲を持とう76．9％であったが，発育不安41％，消耗感64．2％，人生の目的意識の消失31．8％，育児への拒否的気分61．8％，子どもへの否定的心理12．1％と極めてハイリスクな心理状態にあった。その結果肉体的疲労のピークは5．7±5．5月，精神的疲労は8．4±7．4月であった。また複数のわが子を同様に愛することができないと感じている母親は36．7％に及んだ。

考　察：妊娠の始まりから乳幼児期早期の育児にかかわる問題点を調査した。不妊治療による多胎が34％を占めており，不妊治療の子育てへの影響を多角的に検討する必要があると考えられた。また妊娠初期から多胎と知ったときの心理的ストレス，早産傾向のための医学的管理とそれに伴うストレス，出産後児の入院が長期化するために生じる母親の心理的問題，実際に家庭育児をおこなっていく上での肉体的，精神的，社会的負担などが今回の調査で浮き彫りになった。かかる多胎に対する支援は，公的私的なものは殆どなく，育児を手探りで行っていると思われる。また保健所，病院等でも多胎育児支援のノウハウが欠如しているためか，十分に機能していない。

結　論：このような結果を踏まえて，多胎妊娠から育児までを一貫して管理指導できる地域のシステムの作成，妊娠中の心理的サポートを行うカウンセリングと出生前小児科指導，生後は公的ハルパー制度の導入による実際的支援，保健所，小児科などの母子保健担当施設と多胎の会などの連携とその情報の伝達等が必要であり，また第一線に立つ産科医，小児科医，助産婦，保健所等にも系統だった，多胎妊娠・育児についての再教育が望まれる。

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院周産期センター
St. Marianna University School of Medicine Yokohama City Seibu Hospital Perinatal Center

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:1991～1993 年に 9 つの施設を退院した多胎児の妊娠から乳幼児期早期の問題をアンケートにより調査した。その結果,妊娠早期から母体の精神的,肉体的ストレスが高く、アンビバレントな心理状態に容易に陥ってしまう。この状態は出産後も児の入院,実際の子育て期間にも持続し,それを助長しているのは公的,私的な支援の貧弱さにあると考えられる。また不妊治療による多胎が 30%以上を占め,今後この点にも着目する必要がある。